隠れドS上司の
過剰な溺愛には逆らえません

如月そら
Sora Kisaragi

Eternity
BUNKO

目次

隠れドS上司の過剰な溺愛には逆らえません　5
書き下ろし番外編
ハッピーエンドは続く　315

隠れドS上司の
過剰な溺愛には逆らえません

プロローグ

「んっ……」

私の口から堪えきれない声が漏れる。

軽くベッドがきしむ音がして、彼の繊細な指が私に触れる。

とても恥ずかしいはずなのに、その指に触れられ、その目に見られているというだけで、下肢からとろりと熱いものがこぼれ落ちるのを感じる。

「や……恥ずか……しい」

くすりと耳元で笑う声は甘くて熱さを孕(はら)んでいた。

「こんなにしてるのに？」

見られている部分が熱くて蕩(とろ)けそう。

彼の指がゆっくりと私の中を探る。そしてその一点を見つけるのだ。

「ここ……？　かな」

「んっ……あ、そこ……ダメっ」

「そう？　でも君の身体はそう言ってない」

指がそっと抜かれて、彼の太いものがゆっくりと……

「入ってくるのを感じた……っと」

小島陽菜乃(こじまひなの)はパソコンの前で大きく伸びをして、ポン！　と保存ボタンを押した。

「今日はここまでにするかあ……」

陽菜乃はウェブで小説を書いている。無料で閲覧できる小説投稿サイトに登録していて、日々更新しているのだ。ジャンルはＴＬ。いわゆるティーンズラブと呼ばれるジャンルである。

「ティーンズラブとは、女性を対象としたジャンルで、ティーン向けに見える人物設定でありながら、成人向けのような具体的かつ直接的な性的表現が物語の中で展開される創作物を指す」とウェブには説明がある。要するにエッチ描写ありの少女漫画展開の小説、ということだ。

陽菜乃はサイトの中ではなかなかに人気のある作家の一人だった。

けれどここ最近、悩んでいる。

読者の評価がどうにも辛(から)い気がするのだ。

『リアリティがない』

『ネタが尽きた？　笑』

（尽きてはないよ……尽きてはないけどさ……）

ブルーライトカットの眼鏡を外す。

陽菜乃がウェブで小説を読み始めたのは五年ほど前からで、最初にそれを見たときは衝撃を覚えたものだ。

（これを普通の人が書いてるの!?）

初めの二年ほどは、いわゆる「読み専」と呼ばれる、読む方専門でウェブ小説を楽しんでいた。

しかしいろいろな作品を見ていく中で、自分も書きたくなってしまったのだ。自分が読みたいものを書いてみたくなったというのが一番の理由だろう。

書く知識なんてなかった。勢いだけだ。当時はとにかく趣味丸出しで書いていたものだから、今読むと勢い先行で恥ずかしいが、シリーズで出していたものは未だ人気があったりする。

そうして二年三年と書くうちに、少しずつ自分の表現というものができてきたのかな、とは感じていた。書き始めたころは社会人二年目で、趣味としてハマるものが欲しかったということもある。

ただ、好きで書いていただけ。それでも三年も続けていれば、それなりに固定の読者もついてくるものだ。

評価が辛いのは少しだけつらい。それでも心当たりがあったから、陽菜乃には否定することができなかった。

リアリティがないのには理由がある。

そう、理由が……

――小島陽菜乃には、知識はあるけど経験がないのだから……!!

第一章

（どうしよう!?　動けないよ!!）

倉庫の中で、今目の前で繰り広げられているその光景。

目元を手で隠しつつ、その指の隙間から、陽菜乃はしっかりとソレを見てしまっていた。

陽菜乃はカワムラ商会という文具を製作している会社に勤めている。大学卒業後に入社して、今社会人五年目だ。ベテランというにはまだ若いけれど、新人でもない。仕事にも慣れ、そろそろ部内でも戦力として認められてきたかな、というところだ。

ごく普通の、というより、むしろ地味といえるかもしれない容姿。アウトドアな趣味など一切ないため真っ白な肌。栗色の髪は背中の中ほどまである。仕事の時はそれを後ろでひとつにきゅっと結んでいた。大人しそうで物静かな子、というのが会社での陽菜乃のキャラだ。社内ではさほど目立つ存在ではない。

それがまさか心の中で妄想しまくり、ウェブでエロ……もといＴＬ小説を書きまくっている妄想作家とは誰も思わないだろう。

陽菜乃は営業部に所属していて、営業事務を担当していた。この日は先輩から取引先に持っていくカタログを準備してほしいと言われて、倉庫に行ったのだ。カタログの在庫が入った箱が見つからず、倉庫の奥に入り込んだせいで、それを目撃する羽目になったわけである。

いつも在庫を置いているスチールラックに目的のカタログがなかったので、奥のストックが置いてあるところまで探しに行く。なんとかカタログを見つけ出し、いい加減この中も片付けなくてはいけないな……と思っていた矢先のこと。

ガチャ……と倉庫のドアが開いて、誰かが入ってくる気配がした。

中は薄暗かったけれど、周囲が見えないほどではなかった。陽菜乃としてはカタログを一冊だけ取り出して倉庫を出ようと思っていたので、灯りも点けずに奥に入り込んでしまっていた。

ごめんなさい、灯りを点けて……と言おうとして気づいた。

「んっ……はぁ……」

という……陽菜乃が普段、小説で表現しているような甘い声が耳に入ってきたのだ。

（んん？）

棚の隙間からちらっと覗く。すると、入口近くの棚の陰で、男性と女性がそれはそれは情熱的なキスを交わしている。

（オフィスラブのお約束！　倉庫でキスだー!!）

本当にあるとは思わなくて、思わず凝視してしまった。

二人はかなり深いキスをしているようで、時折くちゅ……という水音が聞こえてくる。二人の身体は隙間もないほどにピッタリと重なり合って見えた。

女性の鼻にかかった甘い喘ぎ声が漏れてくる。女性の片手は男性の背中にしっかり回っていて、もう一方の手は男性の胸をなぞり、スーツの隙間からネクタイを緩く掴んだかと思うと、するりとベルトまで下りていき、スラックスからシャツを引き出そうとしている。

「なにするつもり？」

「分かってるでしょう？」

くすくすと笑いを含んだその声は、濡れたような艶を帯びている。なるほど、分かっ

ていて連れ込まれているのか。誘惑する声や甘い喘ぎのような呼吸など、陽菜乃の脳内の取材ノートにどんどんネタが書き込まれていく。

「こんなところに連れ込んだのはそっちだろ」

（ん？）

その声には聞き覚えがあった。

そっと男性の顔を確かめるため、居場所を変える。やはり陽菜乃がよく知る顔だった。

陽菜乃と同じ営業部の係長、森野英（もりのはなぶさ）だったのだ。

森野は、普段は眼鏡に隠れているけれど、実はとても麗しい顔をしているのを知っている。

歓迎会の時に隣の席になって、眼鏡を外した顔を見たからだ。綺麗な二重にまっすぐな鼻筋、甘さを含んだ柔らかい目元。

歓迎会では、新人の陽菜乃にとても気を遣ってくれた。今でも覚えているのは、「小島さんは何を飲んでいるの？」と聞いてくれた時のこと。陽菜乃はさほどお酒に強くないので、その時はカシスウーロンか何かを飲んでいて、そう答えたと思う。

すると「可愛いね」とくすっと笑ったのだ。その顔は仕事の時と違ってとても綺麗で、つい見とれそうになった。この人、とても綺麗な人なんだ、と強く印象に残った。

陽菜乃にとって森野は上司の一人だ。直接指示をもらうこともあるが、いつもとても

丁寧に依頼してくれて、きめ細かな対応をしてくれる、できる上司というイメージだった。話し方も常にきちんとしているから、こんなふうにくだけた感じで喋っているのは聞いたことがない。

女性にキスされて身体を触られまくって、あまつさえ脱がされそうな気配なのに、それをクールに笑いながら見ていてまるで普段とは別人のようだ。

「なに触ってんの？　欲しいの？」

（こ、これ以上は見ちゃいけない！）

最初こそぜひとも参考に！　としっかり見てしまったが、知り合いとなったら話は別だ。これ以上は見てはいけない気がする。もう小説のネタにするどころじゃない。冷静に考えたら見つかるのもまずい。

慌てて陽菜乃は近くのスチールラックの陰に隠れて、両手で目元を覆った。これで見えない、と一安心する。動揺しすぎて、見えていないのは自分だけだということも分かっていなかった。そして、目を塞いでも、耳には十分に聞こえてくることも。

陽菜乃はドキドキしながら気配を忍ばせる。そこへ女性の蕩（とろ）けるような声が聞こえた。

「欲しい……森野さん、焦（じ）らさないで？」

すごい。女性がとても大胆だ。鍵のかかる倉庫とはいえ、いつ誰が入ってくるかも分からないのに。

「こんなところでダメとか言っていたくせに。服の上からでも分かるくらいに勃たせてるなんて、いやらしいな」

森野が彼女の胸の尖っている場所に触れているのを、陽菜乃は指の隙間からしっかり確認する。

森野のこんな言葉遣いは聞いたことがなくて、その容赦のない声音にも陽菜乃は鼓動が大きくなってしまった。

「っ……あ、触って？」

「触ってください、じゃなくて？」

徐々に熱を帯びていく彼女の声に森野は淡々と返している。それでも彼女は冷めることはないようで、むしろクールに返されることにも高まっているように陽菜乃には見えた。

「さ、触って……ください」

「よくできたね。触ってあげようか？　どこを触られたいの？」

その声に、陽菜乃はぞくぞくっとして、力が抜けてしまう。

（ド……ドSだ……このやりとり、絶対ドSだー!!）

思わず陽菜乃はしゃがみこんでしまった。顔に熱が上がってくるのも自覚する。

しゃがみこんでしまった陽菜乃の目の前で、女性はカチャカチャと森野のスラックス

のベルトを外した。ちらりと見えたボクサーパンツの上から、女性の綺麗にネイルが施された指が森野のそこに触れる。

「んっ……」

鼻から抜けるような甘い声を漏らして、女性は森野に口づける。森野は緩くそれを受け止めているように見えた。

甘く絡まる舌が時折、唇の隙間からちらりと見えて、それがなんとも言えず淫靡で、彼女の気持ちよさそうな声に胸がドキドキする。

これは小説でも、資料としてたまに見るAVでもなく、陽菜乃の目の前で起きている現実なのだ。そう思うと、鼓動がどくんどくんと大きくなり、顔が赤くなってしまうのを止めることはできない。倉庫の棚はスチールラックだ。骨組みの隙間から、ばっちりその行為が見えてしまうのだ。

「そんなに欲しいんだ？」

上気した頬と潤んだ瞳を隠そうともせず、彼女は甘えるように森野を見つめた。森野がすうっと指の背で彼女の胸元をなぞる。それだけで甘い声を上げ、彼女は軽く身じろぎした。

指の隙間からそんな光景までしっかり見える。陽菜乃はまるで自分が触れられたようにぞくんとした。

「ねえ、焦らさないで？」
「焦らされるの、好きなくせに？」
森野の普段と違う声や口調に、陽菜乃は目元ではなくて口元をぎゅっと押さえた。
（エ……エロすぎるっ）
その時だった。倉庫の奥でバサバサっと何かが崩れる音がしたのだ。
バレたらまずいっ！　と陽菜乃はささっと奥の段ボールの影に隠れた。興味はあるけど、見つかるのは絶対まずい。外に出ることもできない。
なにせお二人がおっぱじめているのはドアから一番近い棚の前で、陽菜乃が外に出ようと思うと、その棚の前を通るしかないのだから。
「なにか崩れたな」
「そんなのいいじゃない」
「まあ、いいけどね。あまり席を外しても不審がられるだろう。君も戻ったら？」
森野は乱された服を直している。彼女は少し残念そうだった。陽菜乃もちょっとだけ残念だ。
（本当のえっち、見たかったかもしれない……）
しかし、あれだけでも非常にドキドキしたし、キスや身体に触れている光景や焦らされている雰囲気、それに何より彼女の気持ちよさそうな吐息が耳から離れない。

「今度は最後までしてくださいね」
「また今度ね」
そしてドアが開いて、二人が倉庫から出ていく音がした。
一方の陽菜乃はまだ鼓動が収まらなくて、立ち上がろうにも立ち上がれず、大きく息を吐いていた。
（すっごくエロかったわ！）
でも、本当に気持ちよさそうだった。堪えきれない声が漏れてしまうほどの快感を自分はまだ知らない。他人に触れられたり、入れられたりってどういう感覚なのだろう。
これまでキスの音について「水音」と気軽に書いていたけど、その濡れたような音は耳で直接聞いたら、とてつもなくいやらしかった。
ふう……と息をついて、立ち上がろうと目を開けた時だ。
「立てなくなった？　手伝おうか？」
森野が腕を組んで、棚にもたれながら陽菜乃に笑顔を向けていたのだ。
（ひ、ひえぇぇぇぇ……）
「い、一体いつから……」
「奥の荷物が崩れた時かな。頭がぴょこっと動いたのが見えて。まずいなとは思ったけど、隠れたから。覗き趣味なのかなーと思って」

そんなことを言いながら、にこにこと笑って森野が近寄ってくる。
（の……覗き趣味!?）
「誰がですか!?」
「小島さん。だってずっと気配消しながら見てたんでしょ？」
森野は緩く首を傾げてそう尋ねた。
整った顔の人が、そんな仕草をするとあざとすぎる！
「見てませんっ！　ちゃんと目を閉じてましたからっ！　私だって出たかったんです！なのにそこ、ドアの前じゃないですか！」
「そうだよな。見つからなくてよかったね。彼女、少し露出の気があるから、見られてたら喜んじゃうよ」
陽菜乃はさらにくらくらする。めまいを起こしそうだ。奥深すぎる。そういったことは奥ゆかしくいたすものだと思っていたのだけれど、見られて喜ぶとは。
小説ならどこまでだってエロくても気にならないのに、現実はそうでもない陽菜乃である。
「森野係長、ここ会社ですよ。こんなところでダメだって思わないんですか？」
「その背徳感がたまらないんだろ、きっと？」
そう言ってくすりと笑う。仕事中と印象が全然違う。真面目な人だと思っていた。

会社の中でこんなことしてしまうなんて、真面目どころかとんでもない人だ！
「隠れて覗き見なんてしてたら、興奮しないか？」
そんなことを言う森野を陽菜乃はキッと睨んだ。なのに薄く笑った森野は陽菜乃の前に屈んで、その顔を覗き込んできたのである。急にその距離が縮まり、整った顔が近い。
睨みはしたものの、薄く笑っている森野を見返すことはできなくて、目線を落とし、目の前のネクタイをじっと睨みつける。
ムカつくことに、シャツとネクタイのセンスはすこぶるいい。
「どうだった？　こんなところで今にも始めちゃいそうなの見て、興奮しなかった？触れられてるところ見て、身体が熱くなったりは？」
森野は陽菜乃の後ろの壁に手をついて、陽菜乃の耳元に囁く。
（か……壁ドン!?）
逃げられないその感じ。
またさらに距離が一気に縮まる。森野の香りに包まれてしまって、陽菜乃はさらに後ずさる。ウッディとシトラスの混ざったような爽やかな香りにくらくらした。顔が熱い。
興奮……しなかったとは、言えない。身体も熱くなっていたかもしれない。だって、激しい鼓動がしていた。今も。こんなにどきんどきんいっていたら、森野にまで聞こえるんじゃないかと思う。

「耳が赤い」
その耳をぱくっと咥えられる。背中の辺りがぞくんっとした。寒気にも似ていたけれど、それとは明らかに違う感覚だった。
「ひゃ……」
変な声が出てしまう。
「可愛くて美味しそうだ」
耳元で低く吐息混じりにそう囁かれて、腰の辺りがぞくぞくする。足元が心もとない。くちゅっと耳に舌が差し込まれた。
「っや……」
掠れたような甘い声が漏れるのに、自分で戸惑う。さっきまで誰かを抱こうとしていたくせに、陽菜乃にもイタズラするなんて。
そのまま力が抜けそうになったが、陽菜乃は必死で森野をぎゅっと押しのける。必死で睨んだけれど、腰は抜けているし、目なんて絶対うるうるだと思うし、顔は熱いままだからきっと真っ赤だろうし、迫力なんてないことは分かってる。それでも就業中はダメだ。
そんな陽菜乃を、森野は面白そうな顔で見ていた。
「し、就業中ですよっ」

ぷっ……と噴き出す声が聞こえて、森野があははっと笑い出す。
「小島さん、真面目かよ」
からかわれた!?
「じゃあ、就業中じゃなければいいわけ?」
陽菜乃は言葉に詰まる。
「それってイエスかな?」
ずっと近くで仕事していたのに、こんな人だなんて思わなかった。
(こんな、こんな危険な色気のある人だったなんて……っ!)
「見てただけなのに腰抜かすほど感じちゃって。ねぇ、気づいてる? すっげぇエロい匂いさせてんの」
スカートの裾から手を入れられてショーツの上をつん、とつつかれた。
「や……」
「可愛い声。濡れてるし」
森野は濡れた指先を陽菜乃に見せたあと、その長くてスラリとした綺麗な指を鼻先に持っていく。
(な……なにしてんの? この人)
「エロくていい匂いする」

（わーっ！　へ、変態だっ！）
「ちょ……やめてくださいっ」
陽菜乃はその指に飛びついて、ポケットからハンカチを出してごしごし拭いた。そんなところの液を指先で回収された上に嗅がれるとか、泣きそうだ。
「森野係長、そんな人だなんて思いませんでした！」
目の前にいた森野を押しのけて、半泣きで陽菜乃は倉庫を後にする。
（えっちってすっごく生々しいし、すごくえっちいし、当然なんだけど。すごくドキドキしたしっ！）
その後からの仕事は、もちろん集中なんてできるわけがない。とにかく頭がぱんぱんで、気づいたらアノ出来事にすぐに気持ちがいってしまう。
密やかな声や、甘くこらえられない喘ぎ、そして陽菜乃が耳にキスされた感覚なんかだ――
しばらくして戻ってきた森野は、何事もなかったかのように席について仕事をしているのだから、なおさらだった。
だから……だから、集中できなくて、残業になってしまったのだ！
だって、どうしたって気になる。普段優しい係長である森野が、あんなにＳっぽくて、しかもとても物慣れた様子だったのだから。陽菜乃のスカートの裾から手を入れること

すら、なんの抵抗もないようだった。
エッチな小説を書いているのだから、それを表現することはできる。多分先ほど見たあの状況を小説にしなさいと言われたら、陽菜乃はためらいなく文章にすることができるだろう。
けれど、現実はもっと何というか、抵抗できないくらいのインパクトがあって、それが陽菜乃には衝撃的だった。森野はそれを軽々と実現している。
しかもその後はなにごともなかったかのように淡々としているのだ。どういう人なんだろう？　割り切った関係に慣れているのだろうか？　陽菜乃は先ほどの光景や森野のこと、いろんなことが頭の中をぐるぐるしてしまった。そのせいで集中できなかったのだ。
早く帰って小説の続きを更新しなくてはいけなかったのに。
陽菜乃が勤めているカワムラ商会はホワイト企業だ。ワークライフバランスというものがしっかり考えられている。具体的にいうと、二十時になると会社の灯りが落ちるのだ。
今日は残業確定だった陽菜乃は、日中に事前申請を出し、自分のデスクの周りとパソコンの電源は落ちないようにしてもらった。全然進まなかった入力作業を必死で進めていた。
「あれ？　小島さん？」
そしてなぜこんな時に限って森野が戻ってくるのか!?

「うちの部署の電気がついていたから、誰が残っているんだろうと思ったんだよ。手伝おうか？」

森野にそう言われて、後ろに立たれる。

「だ、大丈夫ですからっ！」

後ろを取られるとか怖くて仕方ない。

今日のあの時までは理想の上司だったのに。今だって気を遣ってくれてすごく優しいと思う。でも、この人は社内でえっちなことをしてしまうような人なのだ！

陽菜乃は必死でデスクの上を片付ける。

「そんなに警戒されると、意識されてんのかなって思ってしまうんだけど」

笑いを含んだ声でそう言われた。からかうような声音に陽菜乃は即答する。

「してませんっ！」

「答えが早いな。まあ、どっちでもいいけど、こんな時間までなにかしているのなら、上司としては把握しておかなくてはいけないんだけどね？」

上司として、と言われればそれはそうかもしれない。

「今日中に入力を頼まれていた作業が終わらなくて、残業になってしまったんです」

普段ならそんなことはない。陽菜乃は仕事が手早く間違いも少ない社員として、我ながら頼られていると思う。

「まだ残ってるの？」

「いえ！　終わったので帰ります！」

そこで慌てすぎたのか、陽菜乃の手からカバンが滑って、中身が派手にぶちまけられてしまった。動揺しすぎて失態を繰り返す自分に泣きそうだ。

森野は手で顔を覆っていたけれど、よく見たらその肩が震えていた。

「っく……ふ、あははっ……。本当にごめんってば、君には何もしないよ」

床に落ちてしまったカバンの中身を森野は屈んで一緒に拾ってくれる。

悪い人ではないのだ。本当に。

（ただ、悪いオトコなだけ）

「へぇ……？」

面白がるような響きの声が聞こえて、陽菜乃は森野の手元を見た。

森野の手元でカバーのかかった文庫本が開かれている。

「わーっっ!!」

よりにもよって、今日は同じサイトからデビューした友人の本を持ってきて、通勤中に読んでいたのだ。陽菜乃の友人といえば、もちろんゴリゴリのＴＬ作家である。

『太腿は大きく開かれ抵抗する術を持たなかった。差し入れられた指はごく浅いところをそっと撫でる……』やけに詳しいな。やっぱり浅いところって気持ちいいの？」

本を閉じて陽菜乃に差し出しながら、森野は笑顔で尋ねる。
（なんで開くの!?　なんで音読するの!?　そして、なんで聞くのよーっ!?）
「じゃあ、帰ろうか。鍵をかけるから」
先ほど目にした本も、昼間していたことも、何もなかったかのように森野は陽菜乃に声をかけた。
本を受け取った陽菜乃は、カバンをぎゅっと握ったまま顔を上げられなくて俯く。
視界には、立ち上がった森野の靴が入っていた。ぴかぴかに磨かれたウイングチップ。スーツやシャツやネクタイだけではなくて、森野は靴まで趣味がいいらしい。けれど、そんなことではなくて、陽菜乃には森野に聞いてみたいことがあったのだ。
「も、森野係長っ……」
「ん？　なに？」
その森野の優しい声に、そうっと陽菜乃は顔を上げる。陽菜乃を見て、立ち上がるのを待っている森野はとても優しい顔をしていた。ずっと陽菜乃が尊敬していた顔だ。
顔が……悔しいけれど圧倒的に顔が良い。その顔の良さについ呑まれそうになるが、どうしても聞いてみたいのだ。陽菜乃は意を決して口を開いた。
「その、森野係長はそういうことに慣れていらっしゃるんでしょうか？」
「そういうこと？」

「昼間のような、あの……あれ……」
「あ？　セックス？」
（身も蓋もっ！　身も蓋もないのよっ！）
けれどそんなことを恥ずかしがっている場合ではない。戸惑った末に陽菜乃は頷く。
「まあ、慣れていないとは言わないね。どうしたの？　さっきは『そんな人だなんて思いませんでした！』って半泣きになっていたでしょう？　俺、無理やりにする趣味はないよ」
描いたように綺麗な森野の眉根がすうっと寄っている。
そうだろう。昼間は恥ずかしかったとはいえ押しのけてしまって、先ほども警戒警報発令レベルの反応をしてしまったのだ。
「教えてほしいんです」
「なにを？」
「その……セックス……です」
「は？」
森野は目を見開いて、陽菜乃をまっすぐに見る。
「君がそんなことをなんの意図もなく頼むような人だとは思えないんだけど？　どういう理由で？」

陽菜乃はぎゅっと膝の上で拳を握った。
「読まれましたよね？　先ほどの小説。ティーンズラブって分野の小説です」
「ティーンズラブ……どの辺が？　あれR指定だろ。完全に指入ってたと思うんだが」
一般にはあまり知られていない分野だし、男性ならば知らないのはなおさらだろう。
「ティーンズラブっていうのは、ティーン向けに見える人物設定でありながら、成人向けのような具体的かつ直接的な性的表現が物語の中で展開される創作物なんです」
「うん？」
いきなりこんな説明をされて、なぜこんなことを言われるのか分からない森野は首を傾げているだけだ。それはそうだろう。
「ありていに言えば、少女漫画みたいな展開の、エッチもありのストーリーです」
「なるほど？」
「私、そういう小説を書いてます」
「もしかしてさっきの小説、君が……？」
「いえ！　あれはデビューした友人が書いたもので！　でも同じようなジャンルです。私はまだデビューはしていません。私には不足しているものがあるんです」
「何？」
「表現力、だそうです」

森野は陽菜乃の向かいの椅子に座って、ゆったりと脚を組む。
「ふん？」
いつも相談に乗ってくれる上司としての態度で、森野は答えた。だから陽菜乃は警戒せずに話を進められたのだ。
「まあ、あの程度で悲鳴を上げていたくらいだから、そういう小説を書くにしては経験不足は否めないだろうね？」
真顔で肯定された。
「あ……あの程度って、どういうことですか？　その、やっぱり倉庫でされてたみたいな……」
森野は少し考えているように見える。そして、陽菜乃に笑いかけた。その笑顔は決して爽やかなだけのものではなくて、とっても艶を含んでいて……色気のある笑みだった。
「それは取材？　取材なら受けても構わないよ。小島さんはお勉強したいってことだよね？」
ぱあぁっと陽菜乃の表情が明るくなる。
「はいっ！　取材です！」
取材。そう、これは取材だ。
陽菜乃には秘密がある。ＴＬ作家をしていることではなくて――今まで付き合って

きた人とそういうことにならなかった理由が。その秘密のせいで、陽菜乃は自信を失い、臆病になっていた。

だからこそ、気安く受けてくれた森野の態度に、つい安心してしまったのだ。

「じゃあ、金曜日はどうかな？」

「分かりました。よろしくお願いいたします」

普通に研修を受けるかのように、ぺこりと頭を下げる陽菜乃に森野が苦笑する。

この時、陽菜乃は失念していたのだ。森野が悪いオトコだということを――

「じゃあ、金曜日、ゆっくり教えてあげる。セックスってどういうものかって」

陽菜乃の手を取って、森野は指先に軽くキスをした。

ぴくんっと陽菜乃の身体が揺れてしまう。その揺れは指先にまで響いただろう。

森野はわざと、見えるようにゆっくりと陽菜乃の指を口に含んで、舌を出し、指の間を舐めてきた。

それが陽菜乃の視界に入って、慌てて目を逸らす。

「っ……」

濡れた舌先が指をなぞる。舐めているのは指だけなのに、その光景はひどく淫靡だった。

胸の鼓動が大きく響くのを陽菜乃はどうすることもできず、ただされるがままになることしかできなかった。

森野は手を離して、陽菜乃に笑顔を向ける。

「じゃあ、帰ろうか」

陽菜乃は熱くなったままの身体で、こくりと頷いた。

家に帰って、その日倉庫で目にしたことを、陽菜乃はパソコンに打ち込んでいく。

そして、帰り際、森野に緩く指を舐められたことも。

――すごくドキドキした。

指を舌が這っていく感触は、初めてのものだった。

ただ舐められているだけではなくて、視線が絡んだり、気持ちが入ることで一気に淫靡なものとなったのだ。背中がぞくぞくした。

倉庫では、キスをしながら触れられたりしている他人の姿を見て、興奮しなかったのかと聞かれた。

興奮なら……した。

濡れてしまった下着に触れられて、自分が思いの外感じてしまっていたことも分かった。

見ているだけでも感じてしまったのに、アレをしてくれる、というのだろうか？

（――ん？）

そうしてふと気づく。陽菜乃には知識だけはやたらある。エッチなコミックスも、小説も、シチュエーションボイスもなんならアダルトビデオも、小説を書くために相当見た。

（取材させてくれるなんて機会、そんなにないんじゃ……）

この際もう、リクエストとかしてみるのはどうなんだろうか？　こういうシチュエーションはどうですか？　とか。

今書いているのはS系上司の出てくるオフィスものだ。陽菜乃はパソコンの前に座って、小説のサイトを開く。倉庫でのあのシチュエーションはぴったりで、ちらっと見た……いや、むしろ割とガン見に近かったあのシーンを書くために、陽菜乃は何度も何度も繰り返し思い出し、文字に起こしていった。

甘くねだるような声も、濡れたような音も――陽菜乃は無意識ではあったけれど、何度もなぞるようにあの時の出来事を思い返していた。

気づいたら真夜中になっていて、小説を一気に書き上げていた。普段ではありえないほどの文字数を書く。それをゆっくりと読み返し、誤字脱字がないか陽菜乃は確認した。

後日もう一度確認して、読んでいて分からないところがないかなど、落ち着いて第三者目線で見られるようになってからまた直す。そしてようやくサイトに上げる。サイトに上げてからも編集を続けて、これでよしとなったら、ようやく公開予約を入れるようにしている。

それでも、自分で目にするというリアルのインパクトはとても強くて、表現ひとつ取っても、今までとは全く違うように感じた。

（早く読者さんに届けたいな）

見ただけでこれだけたくさん書けるのなら、実際に取材なんてさせてもらったら、もっといっぱい書けちゃうのかも、とうきうきする。

実体験がどれほどのものか、実際に経験したことのない陽菜乃は分かっていなかった。

「セックスを教えてください」とはどういうことなのか。

「あ、小島さん」

「はい」

「これ、対応をお願いしたいです」

相変わらず、昼間の森野は眼鏡姿も相まって、とても真面目そうに見える。

あの後は、特に何ということもなく日々が過ぎていった。あの時のことは夢だったのだろうか？　と思うくらいだ。

目の前の真面目そうな係長が女性に倉庫に連れ込まれたあと、陽菜乃にも……えっちなことを教えてくれる、といったあれは。

森野はクリアファイルに入った資料を陽菜乃に手渡した。

あの時の妖艶な姿はどこにもない。強いて言うならウェブ上にはある。あの時のこと

を陽菜乃は小説として公開したのだから。
小説がなければ夢だったのでは？　と思うような出来事だし、そんなことを教えてくれる、というのも信じがたいことだ。
（しかも小説は好評だったし……）
ものすごくいい評価がたくさん付いてしまった。
「よく確認してくださいね」
「はい」
森野に言われて、返事をした陽菜乃は席に戻り、受け取ったクリアファイルの書類を確認しページをめくる。その手が止まった。付箋にメッセージアプリのＩＤが書いてあったからだ。
『後で連絡するから、登録しておいて』
一瞬、顔がかあっと熱くなった。陽菜乃が顔を赤くしていたって誰も気にするものではないだろう、とは思いつつも、周りを見回して、誰も気づいていないことを確認する。
案の定みんな、自分の仕事に手一杯で、陽菜乃の様子に気づいた人はいないようだった。
陽菜乃がホッと胸を撫で下ろした時、当の森野と目が合ってしまった。森野はくすっ、と訳知りな雰囲気で笑う。
一瞬だけ漏れ出た色気。きっと誰も気づいていない。その秘密めいたやり取りに、陽

菜乃の心臓がどきんと音を立てた。色気は、森野がモニターに顔を戻した途端に消えてしまった。
（あ、普通に戻った）
普段はきっとこんな感じだったから気づかなかったのだろう。
陽菜乃は付箋を剥がして、スマートフォンのケースの内側にぺたっと貼り付けておく。
夢でもなかったし、森野も忘れてもいなくて、あの約束はまだ生きていたらしい。
こんなことにまで律儀な森野は、やはりいい人だと陽菜乃は思う。
昼休憩の時に、休憩室でお弁当を食べながら、先ほどの付箋に書かれたＩＤをアプリに登録し、森野にメッセージを送る。
『よろしくお願いします』
すると割とすぐ既読がついた。
『こちらこそ』
それに陽菜乃はペコリとおじぎをしているスタンプを送っておく。
休憩室の窓から見えるお日様がやけにキラキラして見えた。

そして約束の金曜日がやってきたのである。
この日は特に問題なく仕事も進んだ。定時を回ったことを腕時計で確認して、陽菜乃

は席を立つ。
ちらりと森野の方を見てみると、まだ仕事が残っているようで、書類を片手に少し難しそうな顔をしていた。
席を立った陽菜乃はスマートフォンを確認する。森野からメッセージが入っていた。
アプリを確認すると、ホテルのＵＲＬが貼られている。タップするとホテルの案内を見ることができた。
（――あ、すごくちゃんとしたホテルだ）
何か特別な時や旅行でもないかぎり使わないようなホテルだった。森野の名前で予約してあるから先に入っていて、というメッセージである。
（なんか、慣れてない？　そりゃ慣れてるか……。大人の男の人なんだものね）
まだ仕事中の森野は、陽菜乃を見て胸ポケットに手をやった。その手にはスマートフォンが握られている。パタパタっと画面に触れてなにか文字を打っている様子なのが分かる。
『ごめん。少し遅くなるから、先に行っていて』
陽菜乃もその場で返信する。
『了解です』
そして、少し考えてもう一文追加で送った。

『素敵なホテルを予約していただいて、ありがとうございます』
一瞬、森野が微笑んだように見えた。
陽菜乃はホテルに向かい、フロントで予約の名前を告げる。
フロントの男性はにこやかに陽菜乃にカードキーを差し出してくれた。
「お部屋は二十五階です。エレベーターでカードキーをかざしてから階数ボタンを押してください」
陽菜乃はカードキーをもらって、改めてホテル内を見る。ロビーはモダンでシックな内装で、つややかな石張りの床に黒の革張りのソファが置いてあり、落ち着いた雰囲気だ。ロビーに使われているライティングもキラキラとしたものではなく、ややアンダーで落ち着いている。置いてあるオブジェや花もシンプルでシックだ。
（大人の逢い引きにはすごくいい）
会社でも森野は派手ではないけれど、ひとつひとつの仕事をきちんとこなしていく人だ。冷静に考えてみると、森野は取引先ともトラブルを起こすようなことはほとんどない。すごく、きちんとした人なのに。
（ギャップがすごい……）
仕事中は目立つこともなく、淡々と真面目にこなしているくせして、プライベートはこんなふうに慣れた様子で女性をエスコートして、相手によってはＳにもなれる。

あの眼鏡に隠されているけれど、素顔はとても麗しくて。しかも女性にスマート。
陽菜乃の森野への興味は尽きなかった。
森野がリザーブしてくれたのは二十五階の部屋で、カードキーをエレベーターのパネルにかざさないと階数ボタンの押せない部屋だ。これはエグゼクティブフロアのような気がする。
そんな部屋をリザーブするなんて、慣れているとか、慣れていないとかの問題なのだろうか？　経験のない陽菜乃にはよく分からない。ただとてもスマートだということは分かった。
そして、ロビーの高級感を見た陽菜乃はふと不安になる。
（お部屋代、割り勘だったらどうしよう……）
財布の中身を考えてみた。ちょっと心もとない気がする。ＡＴＭでお金を下ろしてこよう。そう決心した陽菜乃は再度フロントへ向かった。
「あの、すみません。この辺りにコンビニはありますか？」
フロントの男性は陽菜乃の質問に親切に答えてくれる。ホテルから歩いて五分ほどの場所にあるらしい。ついでに飲み物などの買い物もしておきたくて、陽菜乃はコンビニに向かうことにする。
ＡＴＭでお金を下ろすことができた陽菜乃は、ようやく安心した。

（これで割り勘でも大丈夫）
そして目に入ったのは衛生用品の棚だ。その前で陽菜乃は足を止める。
（買っておいた方がいいのかしら？）
棚に並んだパッケージを陽菜乃はじーっと見つめた。
（いや、なんか森野係長慣れていそうだったし、自分で用意するかも）
でも用意するのもマナーだと、どこかで読んだ気もする。
（使用期限とかあるのかしら……。それに用意って、いくつ用意したらいいの？）
陽菜乃は、ハッとした。
（いつも絶倫想定で書いているくせに、何回するのか分からないわ）
なるほどリアリティがないと言われるわけだと、自分のリサーチの甘さにため息が出る。
それよりも、今日、今どうするかだ。
陽菜乃はとりあえず目立った白い箱を手に取ってみた。
表面には『人生が変わる！　〇・〇二ミリ』と書いてある。
『人生が変わる！　〇・〇二ミリ』。なにやら深い。人生が変わるらしい。
陽菜乃は人生が変わるほどのセンセーショナルさは求めていない。そっとそのパッケージを棚に戻す。コンビニとはいえ、かなり種類が豊富だ。

『ＳＵＰＥＲ　ＧＯＫＵＡＴＳＵ　もはやなにも感じない』
（もはやなにも……）
パッケージの語彙力がすごい。陽菜乃は首を傾げる。
（感じなきゃダメじゃない？）
そして、パッケージ裏面の説明書きを見て、陽菜乃はさらに衝撃を受ける。
（そっか！　皆が皆、長持ちするわけじゃないんだわ！　すごい！　深すぎる！　コンドーム！）
隣を通り過ぎた男性がぎょっとしていた。うら若くて、そこそこ可愛らしい風情の女性が衛生用品の棚の前で、コンドームの箱裏の説明書きを食い入るように見つめているのだ。
それは引く。
しかし、その種類の多さは陽菜乃を戸惑わせるばかりだ。
（どうしよう……）
こればかりは店員に聞くわけにもいかないことは、さすがの陽菜乃も理解している。
結局、陽菜乃は黒くてスタイリッシュなパッケージのものを選んだ。まさかのジャケ買いである。

ホテルに戻り、エレベーターに向かうと、とんと肩を叩かれた。
綺麗な顔の森野が微笑んでいる。
「小島さん、見つけちゃった」
「あ、森野係長。お疲れ様です」
森野は苦笑した。
「仕事中みたいだな。何？　コンビニ？　買い物行ったの？」
「はい」
慣れた様子でエレベーターを操作した森野が階数ボタンを押す。
「持つよ」
自然に陽菜乃の手から袋を受け取るのも、とてもスマートなのだ。
「何買ったの？　デザートとか？」
「あ、飲み物です」
衛生用品は紙袋に入れてくれたので、陽菜乃のカバンの中に入っている。森野が持ってくれた袋にはペットボトル飲料しか入っていない。
「飲み物だけならホテル内にもベンダーがあっただろうに」
「いえ……他にも」
森野はいたずらっぽい顔で陽菜乃をわざと覗き込んで、きゅっと手を握った。

「もしかして、スキンとか？」
（ば、ばれたっ！）
「大事なことだよね」
優しい声だった。森野の声はトーンも響きも、陽菜乃の耳に心地よく聞こえる。高すぎも、低すぎもしない声の持ち主なのだ。けれどこんな時は普段の仕事の時とは微妙に違う甘さを含んでいる。少しひそやかな響きは、二人の距離感のせいもあるのかもしれなかった。
しかも陽菜乃がコンドームを買いに行ったことをからかうでもなく、大事なことだと言ったのだ。陽菜乃はその瞬間、優しくそう言ってくれた森野の言葉に胸がいっぱいになった。恥ずかしいことではなくて、大事なこと。握っていてくれていたその手を陽菜乃は握り返す。
するとその手を軽く引かれて頬にキスされた。
「ごめん、部屋まで我慢できなかった。そんなふうに握り返すから」
苦笑気味に微笑まれて、陽菜乃の胸はきゅんとする。
もともと整った森野の顔だが、こんな笑顔を仕事中はあまり見たことはない。作った笑顔ではなくて、自然な表情だ。
こんな森野だから、身を任せてもいいと思えたのかもしれない。急に恥ずかしいような気がして、陽菜乃は森野の顔が見られなくなって、俯（うつむ）いてしまった。それでもつい盗み見たくなってしまう。
（本当に顔が綺麗なのよね）
近くで見ると森野は白くて綺麗な肌をしていて、焦茶色の瞳は長いまつ毛に彩られている。綺麗な二重の持ち主で、甘さのある優しい顔立ち。
見惚れそうになっていると、エレベーターが二十五階に到着し、森野にリードされて部屋の中に入る。
緊張していた陽菜乃の耳には、カードキーでロックが開くカチャ……という音さえやけに響いたような気がした。
部屋の中はインテリアもモダンで、正面の大きな窓からは夜景が綺麗に見える。何層にも重なるビルと高層階からの奥行のある景色は、キラキラと星屑を散りばめたようだった。
「すごい……素敵……」
「小島さん、何か食べた？」
「いえ。コンビニに行っただけです」
「お腹すいたよね？　下のラウンジで軽く何か食べる？」
そう言ってくれたけれど、陽菜乃が目を落とし自分の格好を見ると、引くくらい地味

だった。
「ん？」
「ホテルのラウンジに行けるような格好で来てないんですけど」
「じゃあ、ルームサービスを頼もうか」
森野は陽菜乃にルームサービスのメニューを手渡してくれる。
「なんでも好きなのを頼んで。コース料理でもいいよ」
優しい表情だ。陽菜乃はじっと森野を見つめた。
「どうしたの？」
「森野係長、どうしてそんなに優しいんですか？」
「優しいかな？」
「はい。とっても」
森野は立ったままだった陽菜乃の手を引きベッドに腰掛けさせてくれて、自分もその横に座る。
近くなった距離に、陽菜乃はまた胸がドキドキしてくるのを感じた。横に並んでいるから、綺麗な顔が見えないだけまだ救いだ。真横で肩が触れあいそうな距離。何だか爽やかないい匂いがするし、その香りだけで鼓動が大きくなりそうだ。
「宮沢賢治の注文の多い料理店って知ってる？」

そう耳元で囁かれた。
もちろん知っている。二人の狩人が山の中で迷った時に『西洋料理店』を見つけて、店に入る。『当店は注文の多い料理店だ』と書かれており、二人は、それは「客からの注文が多いから、料理が出てくるまでに手間取るのだろう」と解釈した。店に言われるがままに準備をしていくと、それは二人を料理の食材として食べるための下準備だった、という話だ。
（それはつまり……？）
「あの……私食べられちゃうってことですか？」
だからルームサービスを？　栄養をつけて食材にされてしまうということ？
「美味しいかどうかは保証できませんけど！」
身体を折り畳まんばかりにして大笑いした森野は、ベッドの横にあった電話機でルームサービスを頼んでいる。陽菜乃に向かって笑顔を向けた。
「軽食でいい？」
「はい」
先ほどのやりとりを思い出したのか、まだくつくつと森野は隣で肩を揺らしている。
「食べられに来たのかと思っていたけれど？」
それはある意味正しくはあるのだが。陽菜乃は返す言葉がなかった。

「どうだろうね？　美味しく仕上げて食べちゃうつもりかもね？」
ベッドの上で隣に座っている陽菜乃の顔を覗き込んでくる森野の表情は、イタズラっぽさの中に妖艶さを含んでいる。
どくん、どくんと大きく音を立てる陽菜乃の心臓はとびだしそうだ。
森野は昼間とは全く違うから、陽菜乃はどうしたらいいのか分からなくなってきた。
「スキン、本当に買ってきてくれたの？」
「はい。迷ったんですけど……」
「迷う……？」
「買うこともですし、知ってます？　種類がすごくいっぱいあるんです！」
それはもちろん森野は知っているだろう。にこりと森野に笑顔を返されて、はしゃいでしまった陽菜乃は恥ずかしくなった。
「専門店でも行ったの？」
コンビニで買ったことはさっき話して知っているのに、からかうように言われたその言葉に、つい陽菜乃は反応してしまう。
「専門店があるんですか⁉」
（専門店とは⁉）
「あるよ。可愛いパッケージとか味がついたものも売っている。行きたい？」

（味ーっ⁉）
「はい！　行ってみたいです！」
ものすごくいい返事をする陽菜乃に、森野は笑顔を向ける。
「今度連れて行ってあげようか？」
「あ……でも申し訳ないです」
今もこんなふうに時間をもらってしまっているのに、さらに森野のプライベートの時間を拘束することに申し訳ない気持ちになったのだ。
「では、声をかけるから、都合が合えば一緒に行こう」
森野は、陽菜乃の負担にならないように、こう返事をしてくれた。
初めて森野と近くで接することになって、やっぱり気遣いができる人なのだ、と陽菜乃は感じた。
「なあ、小島さんはいつもこんなことしているのか？」
「こんなこと？」
「取材と称してこうやってホテルに連れ込まれちゃうのか？　ってことだよ」
さっきまで柔らかい雰囲気だった森野が、今は至って真面目な顔をしていた。
陽菜乃がいつもこんなことをしているなんて思われたらたまらない。
「しません。してません！　表現力が不足してるって指摘を痛く感じたのは、それが本

当のことだからです。私には経験がないから……」
「ちょっと待って。経験がないってどういうこと？　まさか処女ではないよね？」
慌てたように森野が陽菜乃に尋ねる。陽菜乃は首を傾げた。
「えーと……経験したことのない人をそういうふうに言いますよね？」
森野は隣で、はーっと大きくため息をついた。
「付き合った経験はありそうだと思っていたんだけど？」
「それはありました」
「セックスの経験がないってこと？　けど付き合ったらそういう雰囲気になるだろうに」
「なりますけど……」
陽菜乃にはそれがうまくいかなかった理由があった。
「興味はあります。多分、人一倍」
「そうか。けど興味があってもホイホイついて行かないように。どうにも小島さんは心配だな」
「大丈夫！　今までもそんなことありませんでしたから！」
（あれ？　これって胸を張っていい場面なの？）
森野はくすくす笑っている。
「で、何を知りたいって？」

「エッチのリアリティを知りたいんです！　エッチのリアリティって何ですか!?」
「ああ。ＴＬだっけ？　読んでみたよ。結構エロいよね。女子ってああいうのがいいのかなって少し思ったけれど」
――そう！　確かに結構エロ……
（……ん？）
「読んだんですか!?」
「まあ、興味はあったから」
（この人がＴＬ小説を買うとか……）
ＴＬ小説といえば、作品にもよるけれども、最近は表紙イラストもなかなか露出度が高いものが多い。
「本屋さんも驚いたでしょうね」
想像して、陽菜乃はなんだかしみじみした声になってしまった。このお顔立ちも麗しい森野がＴＬ小説を買っている姿を。
「さすがに電子書籍だよ。それでも通勤の時は読みにくかったな。でも小島さん、きっと本名では書いていないよね。ペンネームっていうの？　教えてくれたりとかは……」
「するわけないですよね！」
陽菜乃は即答する。

「なんだー。残念」
森野はあははと笑っているが、本気なのか真面目なのか、からかっているのかよく分からない。
「リアリティ……ね。やっぱり実践してみたらいいんじゃない？」
陽菜乃は森野のその誘うような瞳に逆らえないような気がした。
「初めてでも、森野係長はいいんですか？」
「小島さんこそ、初めての相手が俺でいいの？」
陽菜乃はこくりと頷いた。森野が眼鏡を外してスーツの胸ポケットに入れる。その仕草はひどく妖艶で、目で追ってしまった。
その時だ。ピンポン！　と部屋の呼び鈴が鳴ってどきんとする。
「ルームサービスかな」
そう言って森野はベッドから立ち上がった。ふっ、と普段の様子に戻って、何事もなかったかのようにルームサービスの人に対応している。とても大人なのだ。
陽菜乃はもうさっきからずーっと胸がドキドキして、どうしたらいいのか分からない。なのに森野は全く平気な様子なのだ。鼓動が激しくて大きな音を立てるから自分の声は聞き取りにくいし、緊張して何を話しているかも分からない。きちんと会話になっているだろうか。

立ち読みサンプル
はここまで

それに……初めてなのだと正直に言ってしまった。森野は引いてはいなかったけれど、ひどく驚いた様子ではあった。
（もうやめちゃおうって思わないかな？）
人によっては、初めての女性を相手にしたくないと思ったりする、とも何かで読んだ。
「小島さん、一緒に食べよう」
陽菜乃が考え事をしている間に、食事は窓際に置いてあるテーブルの上にきちんとセッティングされていた。森野が頼んでくれたのは、ホテルのレストランで作られているというハンバーガーだ。オシャレで艶やかなバンズに、ファストフードとはひと味違う、ジューシーでぶ厚いハンバーグが串で刺して挟んである。
「美味しそうです！」
付け合わせも黄金色の綺麗なじゃがいもを揚げたものが添えられていて、本当に美味しそうなのだ。おいでおいでしている森野の向かいの椅子に座った。
「いただきます」
陽菜乃が手を合わせてそう言うと、森野はくすりと笑う。
「どうぞ」
一人暮らしをしている陽菜乃は、普段自宅に帰っても一人で食事をしている。『いただきます』といっても『召し上がれ』と返事してくれる人はいない。